効能

一、不眠に験あること甚だ妙也、開巻すなはち黒甜郷に到り、枕上詩を案ずるに暇なく睡魔の襲ひ来たるは必定

一、読みの美名に隠れて恣意をば展ぜむとする高説大論に接し、お気の毒にも頭痛起きたる時、解毒剤たるべし

一、世評芳しからざるも愚直に文証を求むる人、倦み疲れたらむに多少の慰めあり、某また樸学の道を歩めば也

いとぐちのふみ

言葉は、使う人によってさまざま異なる色づけをされます。昨今あまり流行らない文献学の語も、例外ではありません。よってこれを冠した愚著の門出にあたり、言葉の中身を一応語っておく必要がある[1]でしょう。

文献学を書誌学と同義に用いる研究者も少なくありません。しかし両者は、それぞれ別の学問に振り分けるのが本来のあり方[2]です。文献の吟味と言う点で、書誌学の力を借りることは勿論ありますし、書物が文学研究の根底を形成する要素である以上、これに関わる考究のあれこれを放棄し、一切他人任せにするのはよろしくない、とさえ思います。書誌学を無縁の分野として切り離し、そ知らぬ顔をするのではなく、専門家でなくとも時には自らこれに手を染めてみることが望まれるでしょう。第一部に掲げる文献の具体的吟味は、書誌学を専らとしない者、つまり素人の試みです。なお誤解を恐れず言えば、そもそも書物に対する理解と信頼[3]なくして、国文学の研究は可能でしょうか。文献学との関連を如何に捉えるかはさておき、技術的問題として書誌学に一定程度通じておくことは、国文学成立の十分条件とはならずとも、必要条件の一つに数えられるはずです。

また文献学は、本文の系譜的遡及および原本復元とも全同ではありません。本文の復元に関わる学問は、国文学・国語学・国史学などの名前で呼ばれる領域の研究者もこれに従事することはありますが、むしろ文献学と密接な関連を保持する、しかし独立した一個の学として尊重されなくてはならないでしょう。ただし本当に独立した学となるためには、越えなくてはならない山が高すぎ、当面他分野の専門家がこれを兼ねる以外、現実的な道はなさそうです。

案ずるに文献学は、文献を最大の拠り所として対象へ――出来ることならば対象の秘奥へ――迫る方法と知識の総体、と言う平凡なものです。実際の研究に際してはこれを、それぞれの分野で適用します。当たり前のこととして無反省に受け入れてきた事象に懐疑の眼を向け、ものごとを源流に遡って正確に理解する実証の試みであり、その根帯

を文献に求めるところの営為、と言ってもよいでしょう。したがって、典籍それ自体を研究課題に据える書誌学との差は、明らかです。学問の営みとしては、対象の事実性及び自立性を個別に明らめることがまず求められ、時として体系的研究の大義のもとに行われるところの、こちら側の事情すなわち論者の都合や見通しに合わせて資料を援用する恣意は、いかほど困難であろうとも厳しく退けねばなりません。

そして、思弁・批評・鑑賞・図式化・泰西の理論を輸入し適用することなど、頭のよい方々の好まれる高級な、もしくは高級めかした物言い、あるいは香気のあまりの強さに思わず鼻を蔽いたくなる所謂文学的議論や甘味料たっぷりに味付けされた鑑賞とはおよそ対極の、愚直で野暮な考証こそ本筋、言葉を換えて申さば、手前勝手な言説や内容の乏しい卓説風の論から自由になって、作品の声を聞き資料と相まみえるための、実証的方法が文献学の生命です。しかしながら、文献によって対象に迫ることが可能である、との命題は、文献学者の切なる想いではあっても、決して証明済みの鉄案ではありません。学的技術の既製品を決まった通りに運用すれば成果が得られるなどと、誰も保証してくれないのです。むしろそのような紋切り型・手垢の付いた手法の繰り返しは、業績量産の方便や渡世の手管ではあっても、嫌悪すべきものと考えます。

過ぎ去った時代は、もはやこれに手を触れることが出来ず、古典文学を育み支えた環境も、直接確かめるすべはないのです。文学作品それ自体、ほぼ全てが損傷を蒙ったかたちを以て伝えられ、仮に理想的な復元がなされたとして、言葉も制度も慣習も余りに遠く隔たってしまい、と言うよりどれほど近づいたつもりでも歴史の生（なま）の形には決して接しえない以上、古典の正当的確な理解は、望みを絶たしめるほどに困難でしょう。とにかく読んで現代の立場から分析論評すればよい、とお考えならば、文献の読みこそが文献学の第一歩でありまた本領であるにせよ、あまりにも楽天的ではないでしょうか。研究は深い闇を手探りで進む不安な行程です。一つ一つ性質の異なる文献に、それぞれの個性に即した異なるやり方で取り組む研究の軌跡が、切なる想いを自ずから確信に昇華し、ひいては普遍妥当への

道を拓く、その可能性の僅かな証明くらいにはなるであろうことを、ささやかに願うほか方途のないところです。

愚著では、先学の記述[4]にならって文献学中の二つの柱、文献の具体的吟味と文献の実際的使用を、第一部「典籍叢説」と第二部「訓詁注釈の試み」に振り分け、それぞれに有縁の考証を配しました。表記その他の語学的掌篇を交えましたのは、文献学由来するところの Philology・Philologie が、言葉の歴史的研究、日本語に即せば国語史に対応する術語でもあることと関わるゆえです。「もとより、文學は言語のかなたに見えて來る世界である。文學は言語をよく知るもののみが、なし能ふところの境地である[5]」とまでは言挙げしませんけれども、作品の言葉を相手とし言葉によって研究を形にする以上、国文学の研究者もまた、言葉の徒でなくてはなりません。なお付言すれば、文献学の高い目標、少なくともその一つは、文献の適切な理解・歪みのない解釈にあります。したがって、対象の正確な観察と記述とに厳しく規制されるにせよ、それらをしのいで、理解・解釈が方法上優位に立ちます。しかしそのゆえにこそ、理解・解釈を最初から大声疾呼するのではなく、文証の積み重ねの末の控え目な提案として、最後に差し出すべきでしょう。ついでに一言加えますと、調査や挙例により地固めをすればするほど、相応の堅牢さを持つ成果は挙げられるものの、その作業自身独立の度合いが高まり、読み・解釈からの距離が一層拡大するように感じられた――その補填として結論部分に文学的味付けを無理強いする論の少なくないゆえん――経験をお持ちの方もおられるはず、これもなかなかの難路です。

また、脆弱な歴史感覚と乏しい歴史知識しか持っていないにもかかわらず、史乗からやや多くを引用しました。その理由を唯一つ選べば、ある種の論理的昏迷――例えば、作品の幾つかの部分において使用名辞の特徴が異なっていればそれぞれの部分の成立時期も異なる、なぜならば各部分の成立時期が異なれば使用名辞も異なるゆえに、の如き――を避けるための便宜です。すなわち、この循環論法めいた昏迷は自家中毒のようなものですので、当該の作品から一旦離れその外側で文証を捜し、対象をより風通しのよい視野に据えてみる、と言うことです。史料の功徳は広大

であり、如上の論法を回避するためのみに限られるわけではありません。しかし、国文学研究に果たす歴史資料の役割についてこれ以上の方法的検討を繰り広げることは、方法意識抜きに学問は成り立ちがたいにせよ、別の賢い方にあるいは別の適切な機会に、譲ります。

そして文献学は、個別専門の細かい議論において大きな力を発揮しますが、ある対象に接近する手がかりを得ようとする時、すなわち初歩的・基礎的な取り組みにおいても、きわめて有効です。江戸明治の資料についての詮索を載せたのは、門外漢が馴染みのない材料を相手にする際の利器たりうることを、示したかったからです。もってその幅広い応用範囲をご賢察ください。

この「栞」は、他人様を文献学の壮麗な山巓におおけなくも誘掖する道しるべ、では勿論ありません。おぼつかない足取りで学問の樹海に分け入り、樸学の小径を辿った道標・枝折りです。粃糠細砕の稿が並びますから、木を見て森を見ず、とのお叱りは謹んで承り、では、あなたは森を見られたのか、などと反問いたしませんので、ご安心願います。大所高所からの議論は望むところではありません[6]し、またその能力も持ち合わせておりません。資料と向き合い憑拠を求める謂わば地を這う実証、それすらも十分に果たしえない薄劣遅鈍の研究者が稚拙にこの道を歩んだ折々の目印と、お笑いいただければ幸いです。

注

（1）用語としての「文献学」については、芳賀矢一・久松潜一・池田亀鑑らの学説を俯瞰した松村博司「文献学と文献学的方法」（『講座日本文学』一二　日本文学研究の諸問題）に就かれたい。愚見では、学説史的記述よりも論者自身の研究法に触れる箇所が一等おもしろい。

（2）書誌学の側からも「書誌学という名を全く知らない人が、テキストの批判、書誌学的研究などを重んずる研究態度を文献学的研究とよぶことがあるが、これは一種の誤解」（長沢規矩也『書誌学序説』第一篇）の意見が出ている。文献学を書誌学や本文研究と同一視するのは、訳語及びその元となった独逸語に照らして、曲解もしくは誤用である。

（3）申すも気恥ずかしいことながら、訳語文献学のもとを辿れば、羅甸語 Philologia、さらに希臘語へと遡って、言葉・書物・学問への愛が原義。時折繙くD.P.Simpson の辞書は、philologia を love of learning, study of literature と釈しており、学術用語として適切な解か否かはともかく、某はこの簡明を嘉（よみ）する。

（4）佐佐木信綱『国文学の文献学的研究』。精緻な方法的定義とは言えないが、実用上は有効である。なおこの書物を版元が戦後再び世に出したのは、有用性の高さから当然とも言える。しかし復刊の底本を昭和十年初版に取り、同十七年の再版に拠らなかったのは何故か。小説や詩集ならば、それぞれに初版本の意味も大きかろうが、研究書としては、訂正増補のなされた再版本の方が、当然重要である。忖度するに、再版本巻末には太平洋戦争肯定賛美の文章が載せられているからではないか。万一、研究書の価値を犠牲にしてまで、大戦中にも出版の良心を失わなかったと擬装する発兌書肆のご意向ならば、それはいただけない話である。

（5）山田俊雄「漢文訓讀の入門（一）」（『日本の言葉と古辞書』）。

（6）大所高所ならぬ対象の細部が見えるようになる、と言うのは、しかし文献学の功徳であろう。それはそれとして、文献学者としても練達高邁であった亀井孝・山田俊雄両碩学の『言語史研究入門』（『日本語の歴史』別巻）は、随所に鋭い洞察が語られ、また両者の資質の差も自ずから現れていて、実践的啓蒙書の域を遙かに越えた刺激的な方法の書となっている。「矛盾のない論理の展開だけでは、たとえ美しい幻想へ人を誘うにはたりても、しょせん、そのようなものは、実際の基盤から宙に浮いた蜃気楼にすぎない」と資料的配慮の欠けた研究へ警告を発する一方、「日本では、文献学は心まずしき技術と堕した」と切り返すのはいかにも亀井節、「片々たる証言から、意外に重大なる事実を推しうる能力を養わねばならないのである。それは、おそらく東西の文献学のもっとも関心をよせてきたことがらでなくてなんであろうか」は山田流の言明である。言葉や表記の細かいところについての愚文は、後者の志高い示唆に対する、ささやかな答案として書かれた。なお若き日の AVGVSTINVS CAMEI が、すでに典籍への深い造詣と驚異的な視野の広さを備えていたことは、『元和本下学集』解題――著作集に再録されていないことを惜しむ――に顕わ。この小さな本は、初心の頃より机辺を離れることのない文献のひとつである。